

## 第七回

### 初午

二月初めての午（うま）の日を初午という。初午は稲作の開始に先立つ祭りの一つである。初午は新暦にすれば三月中旬頃が多く、春分の間近の日になる。稲荷信仰は全国的にみられ、初午には稲荷神社の祭りが盛んに行われていた。稲荷はイネナリの意味であると言い、農業の神への信仰を基盤にしている。また漁村においても稲荷は漁をもたらず漁業神として信仰されるなど、稲荷信仰は民衆の生活に密着していた。さらに初午の頃は空気も乾燥していて、火事の出やすい季節であることから、初午には火防信仰も加わり幅広い意味合いをもつようになった。

### 初午の由来

『山城国風土記』逸文に稲荷神は和銅四（七七一年）二月七日初午に稲荷山三ツ峰に鎮座したとある故事に因み、人々は五穀豊穰・笑福・商売繁盛などを祈願したのが始まりで、全国各地に稲荷神を祭祀する風習が広まったという。

### 初午と稲荷詣で

稲荷信仰は江戸時代に一気に各地に広まった。しかし初午に稲荷神社に詣でることはもっと古くから行われていた。平安時代末期の『今昔物語集』には「今昔、衣曝ノ始午ノ日ハ、昔ヨリ京ニ上中下ノ人稲荷詣トシテ参リ集フ日也」伏見稲荷大社に身分に関係

なく多くの男女が参る日とある。

### 江戸の初午

初午は稲作の開始に先立つ祭りの一つであるが、近世江戸では商売繁盛・笑福・大漁厄除け・子授けなどの神様として信仰を集めた。「伊勢屋 稲荷に犬の糞」といわれるほど稲荷神社がどこにでもあつたようだ。

### 京都の初午参詣

初午は大きな行事である。働く人には参詣の名目で仕事から解放される貴重な時間となる。それは多少お天気が悪かろうが出かけたのである。

安政四（一八五七）年二月十二日に

「幸助 太助 元助 金吉 四人 稲荷初午参り致し候 雨降り候得共昼後俄二行  
弁当

海老 ぼら 鉄砲あへ

玉子 こんぼ 水な 握り飯

くわひ 赤貝」

お弁当持参で、清兵衛宅で働く若者は出かけていった。にわかに出かけて行つたと記しているので、清兵衛にとっては雨なのに出かけたという思いがあつたのである。またこれだけの弁当は前もつての準備があつたはずで、毎年恒例になつていふと思われる。

弁当持参で行く稲荷神社は近所ではない神社で、名の知れた伏見稲荷神社の事であろう。日記にはわかりきった事はあえて記さないで伏見の稲荷とは記していないとみる。

参詣は勿論女性も行っている。安政五（一八五八）年二月十二日に「一お夏」とよ

初午参詣いたし候」とあり、参詣は若い人達の出会いの場となったであろうことは想像できる。同日に「留守番嘉兵衛 武介」少し年上の番頭級の者は参詣卒業ということであろう。この日留守番も同じ昼飯で「外に残り物いろいろ」とあり気遣いをしている。

### 稲荷神社の参詣準備

稲荷神社では大勢の参詣者を迎えるに当ってそれなりの準備が必要である。清兵衛日記にもそれについて触れている。嘉永五（一八五二）年二月七日に

「初午ニ付 清兵衛稲荷に出勤ス」とあるので、住民が支えていたと考える。初午当日以前に一日は手伝う事があるようだ。出勤す、と記しているので義務に近いと思われる。安政六（一八五九）年二月四日に

「一初午の己日（以前の日）稲荷へ行、当町 松屋町 達庄 千切与 近五 鍵半 河

嘉 山市 玉甚 此方 当町方弁当 百疋」とあり、二つの町が関わっている。しかも

手弁当のようだ。職人も混じっているようなので修復するような所もあるかもしれない。文久三（一八六三）年には「初午当日 当年ハ今日一日稲荷へ下り申候」とあり、今年  
は初午当日のみの手伝いで清兵衛含めて八人列挙している。さらに清兵衛は丁稚小僧の

定吉を同行させている。本年は修復の必要がなかったのかもしれない。

### 稲荷神社の食

「修復方〆弁当二重 代拾〆 森太

いた 又〆〆まし

〆重 きす焼付焼 〆重 糸寄付焼

長いも めうど

稲荷一社中〆 酒貳升

いた

巻玉子 ぼら 鉄砲あへ ねぎ

ゐゝたこ 付焼 くじら

高野

みかん

修復方より弁当と記しているのは、業者が仕事として受けているとみる。奉仕している町の方々への弁当ということである。二重重ねの重箱、料理屋森太から届き支払いは一〆増しの十一〆ということだ。いたは板かまぼこの意でかまぼこ、きすの付焼、添えは長いも、糸寄の付焼 めうどは季節を感じさせる春先の野菜、さつと煮たと思われる。

仕事が一段落で酒の席になった。稲荷神社からは酒二升届いた。ゐゝたこも春が旬。

鉄砲あへは味噌和え物で、くじらはくじらの尾羽で白く縮れたプリプリしたものだろう。高野は高野豆腐である。町の人々への気遣いもさることながら町の人々の貢献は大きい。

### 初午の行事食

初午の祭りには「三都とも小豆飯に辛し菜の味噌あへを調し、これを食す」のが習わしと『守貞謾稿』嘉永六（一八六三）年には記している。清兵衛日記には赤飯と鉄砲あへが記されているがからし菜は見当たらない。また稲荷ずしの名前の由来の油揚げも日記にはまだ見当たらない。

### 初午漬け

一月末から二月にかけて初午漬けの記述が多い。初午漬けは本数で数えているので、いわゆるたくあんのような漬物であろうか。文久三（一八六三）年二月三日に「初午漬香の物」と記された箇所がある。現在も残っている漬物なのか、追いかけてみたいと思っている。安政四年二月四日に

「一愛染寺と初午漬大五本到来」

右式本 香勘へ遣し

同壺本 近与へ遣し

初午漬けが初午と関係するのかわからないが、お寺からの到来品である。神社とお寺は明治維新までは一体であった。文久三年二月三日に「稲荷愛染寺と初午漬け到

来」が記されていて、愛染寺と稲荷愛染寺は同一と思われる。また到来品は大体において友人知人におすそ分けすることが多くみられる。同年弐月十三日の場合は

「稲荷方参り候赤飯 初午漬三ヶ町へ配当」稲荷神社からいただいた赤飯と初午漬三ヶ町の人々に分けられた。供物ではなく、稲荷神社からの贈り物になっている。同様の例は安政五年二月廿一日、安政六年一月晦日にも記されている。町人が寺社を支えていたとの裏付けになるとみていいのかもしれない。

また初午参詣は当時の人々にとってかけがいのない娯楽となっていたと想像される。

#### 【参考文献】

- 福田アジオ・他『日本の年中行事事典』吉川弘文館 平成二十四年
- 神田より子・他『神事と芸能』吉川弘文館 平成二十二年
- 田中宣一・他『三省堂 年中行事事典』三省堂 平成六年
- 朝倉治彦編『守貞謄稿』東京堂出版 昭和四十九年